



戀香
繡史

朧月衣物終

五

新
五口
冊七香

遠近
1850
5止



遠13
1850
止

明後夜香繡史

柳浪陳人

著述



臘月夜戀香繡史卷之五

○石枕

浪花

柳浪陳人

著述

話說蝶之助ハ寄波松待どもし来らねばおひ不好わぬ途によ
 どひつと。はどめてんづも。只管悔れどかひふくぬ細きことかざりし
 さらてだよりに猿るるが今ハ伴侶よとくぐり然らる一身とえ
 長歎一声。傍徨とど兼おし振うた猿の叫ぶと聴て腸と斷の
 かりとど何方へ往てしんまるといつう方角とらしまひ。おぢさ
 かくもたど脚よまうせて。赤瓦の崖よ沾けく向ふとぐり小ゆけだ。
 乾ける土の踏よほけて出ぬくぞいと覺束ふし。下面を見れば
 お不うと皇まよしとの抄くと。翠のまうら烟まきとぶ。小草の傾

臘月夜戀香繡史五

ごうりの徑路ある孤僂倖とたどる。這里ハやふだううふまどむ芽
芒の類ひくの丈より高く生のびり。みかーこと尋ねると廣に
路は出す。とかくして峽口より。禁木系いとゆる。石むらしてして
まをさあり。尾花刈萱ふまかけ。樹下露は決を濕し。まゝ初秋
かから。冷氣凝る深谷ふま。山嶽の凡いときく吹く。世の
まふありやど。豁水の音霧がくは。響音くひと。殆げなる祖を
たひ岩が根のじ。出る。所は逾。疊く盤石は階ふま。息巻躋
幸凡二百歩げ。伐木の音丁くと。すゆれども。削おせる山の隔
谷がくは。道官ふま。俊もふ。返景のま。樹脚よりさ。入るに
透見て。下草搔けけ。山後。這出。這里ハ山の腹と剛ぬた。る
うぶ。死所はして。弓でめて。ちちたう。ひ。の形。劍を倒。は

たぐごとし。今や山明を墜べと。亂まして。うら上。覆ひか。ま。脚
下ハ萬丈の懸崖して。鳥も翔ば。膝酸股栗と。うら人。心。地。を
は。峙たづぬる山鴉の志。バ。啼く。は。回顧を。側首。また。ち。お。そ。う
樹の間より。一道の。桐。ま。び。と。び。し。小六七間。茅。簷。あ。ら。れ。る
ぞ。う。ま。し。た。程。ち。の。き。と。う。ら。ふ。ま。バ。鹿。の。か。う。入。跡。つ。さ。た。る。わ。う。り。
那人里。か。え。あ。て。て。と。け。む。を。や。ぐ。て。その。端。の。家。の。裏。口。小。出。り。際
く。助。ハ。その。ま。う。腰。丈。か。る。小。柴。垣。の。類。を。より。ら。う。ら。う。う。う。く。排
徊。て。回顧。せ。バ。桔。梗。白。真。女。即。花。の。類。ひ。狼。藉。は。生。茂。て。あ。や。し。の
草。宇。より。八。南。瓜。ゆ。は。な。ん。ど。お。ぢ。を。合。て。纏。ひ。垂。下。時。を。ほ。が
不。よ。に。笑。乱。ま。つ。浅。間。か。る。憲。の。裏。頭。は。四。十。の。ま。う。の。山。姑。が。瘤。と。へ
眉。稜。小。う。り。いて。ま。あ。く。ま。で。黒。く。葉。條。を。て。髻。か。ひ。と。び。太。布。の。帷。子

の身の半なだは掩し得て、夕栗を貪り、機を織居たり。膝も助
あつしちのり。咳嗽を做せば、那醜婦但見てあやしむ。誰と向ふ。
膝も助長札をはし。俺ハ都方のものか、偶然伴侶は難きて。あ
らぬ山径よふとまどひ千辛万苦この地方までたどりけり。か
行暮しを足が痛りぬ。あつし一炊の宿歇な許したまひぬ。い
那山姑ハ機も下どいと慵うげある面つじて、そはとぞ艱歩たる
不ど所舎やそこ。那里の脊戸より入さや。いふほど膝も助ハ機
まぶも。那山姑が承引ゆるを怪む。とやく裏方と廻来て、破
屋の壁の骨あらしめて、燈火よ代る月が淡し。うら覆る椽板、義
羊の雨あは瀑とはらん。二間三間もあはれど、壊障子もてととと。
あつハ膝ける麦草糸の簾をかうけ、竹の簀子ハ所々繩ゆる。

たる破蒲席なまぐろ布たる。膝も助草鞋の纫ぬ。脚半脱
とてやをう這上りて、蓋みぬのけさまふはし。空の細軟と入とき
脚なまげととしんや安堵足の拇指の血をふとふど。う時むら
アいらつて、山姑ハ土の火桶は膏節が燃して持出側首は措き
つふぞ。客官さうと空腹たまはり。晩飯まつせふん。これど這
里ハ奥山家こそ都人の食終べきものもはし。精糧もふものや
裏て在ると。ア、膝も助いらへて自來する設もはし。何しても
あま。嫂、衆の喫らるものど。彼供はまよといひ。いふは、いふも
んがほぬ。まろ其如く。後、地憩息を。まよ。のひをて。まゆくと
膝も助。あつし。俺等へ。汗をて。快う。接攪ぶ。う。堂の湯と
拿來て。たまはれ。沐浴てんと。たのむ。山姑ハ聽て。おまろ。とや。那里

浴湯を具て置ぬいごたすくとせふとら。指にしまて案内せる方
ゆく小目口おまつる。蝙蝠をたつひのけ。蛇の巣をかぶらうとつ
雑木林の片陰うらひくもさる。嵩の鼻より右き盥盤を居おけり
後頭い真壁ます山の腰するが老樹の枝をれ下り。いと小しやか
るる一道の清水迸しを流して。鹽の山を環るゆく。蝶も助八もこ
どこの山茶花の枝を浴衣うらうけ。浴盆よの湯とらうけしづ
すと顔熱うらなま。清水をよめて。掬入もて浴る。この時天八墨と
澄す。うらぶくかきとて。玉鬼の光をほくもたらたもバ。不とりし
おのらいろもろねど。其処ら瓜敷許もまぐぞろし。と這歩り
そのらく。細く長やふ。覓ゆま。蛇もやららんじ。まごか。さよ
うら。いと暮らう。ふ見ゆる。穴か。い。う。かくむ。う。く。花揚も。ご。ふ。ご。

地も落まぬもどし。身ふあさる。風の醒とぬらうもひ。とうらすも
うち作げバ。雲雲の後回より。一輪の皓月轉つづ。こい。う。く。の。對。面
の松の蓋より。頭ハ釣瓶のたさる。蟬蛇。半身ぬあう。く。鏡のこ
と。見。双。眼。より。金。光。ぬ。紋。ち。月。の。輝。よ。相。映。合。巨。口。ぬ。ひ。く。さ。行。の
舌。ぬ。ら。く。と。吐。その。呼。吸。よ。ほ。ま。と。て。影。の。暮。ぬ。拾。ひ。吞。ま。ど。蝶
も。助。嚇。つ。て。ふ。足。お。く。さ。う。な。く。忙。て。浴。盆。ぬ。お。出。浴。衣。お。つ。ら。う。
裏頭のうらに。跑入らる。お。て。か。く。大。地。震。動。と。山。鳴。谷。應。へ。う。さ。志
ば。く。ま。て。止。ま。ぬ。そ。ハ。那。の。大。蛇。が。じ。り。落。る。音。と。ぞ。あ。う。る。蝶。も。助
啖。一。撃。呆。ま。て。声。さ。た。て。ほ。も。外。面。へ。そ。り。出。槿。花。の。垣。根。よ
傍。徨。動。悸。じ。り。て。息。ま。り。ま。い。も。中。と。使。ま。一。身。と。ふ。ま。居。ら。う。
この時。隔壁より。出。來。る。恠。の。人。奴。垣。ぬ。遠。て。ん。え。く。が。脊。戸。よ

蜂蟻家
合ふりて
性く肝
大蛇の
こころ



五

居て啣く呼、山姑と密語く光景たる。蝶助ハ身とて例
て硯ひやよ、かの漢子のるまゝ。宅上ハ近年の造化なるべし。那
野猪ハ早獲らむ。小やとりふ。山姑回答て。それその事。昨夜
燈籠の報あり。今朝喜鵲の噪ありし。は福祿なり。とてさうせむ
るべし。箭負猪ハ。綱をさたり。貨売ハ。和玉へまいらむ。とてし。糸の
皿山の繪具。よなり。活とよ。とて。戯う。河の端。そこそこ。とて
く。とつ。や。て。草廳。よ。来て。え。と。バ。恰どぬ。山姑ハ。こも。醜醜なる
膳部と。拿來。る。蝶助。助。が。膝。方。よ。居。お。と。火。桶。よ。膏。節。夥。く。べ。つ。だ
あ。り。明。く。照。せ。り。蝶。助。ハ。助。い。へ。ら。く。今。往。湯。浴。さ。せ。し。と。て。ろ。よ。怖
ろ。と。大。蛇。あり。て。さ。う。し。ふ。て。ら。う。と。不。意。肝。潰。ら。う。那。の。大。蛇。ハ。人
ハ。腹。ぬ。や。と。再。び。戦。栗。は。し。け。官。け。る。山。姑。回。答。て。い。へ。ら。く。不。妨

的。の。蛇。ハ。這。裏。頭。の。崖。の。廻。脚。を。洞。穴。よ。蟠。ま。う。位。な
と。り。ふ。い。は。て。蟄。蛇。を。ど。ん。腹。を。ら。あ。り。た。え。て。背。より。人。ハ。仇。せ。て
い。わ。う。す。と。い。ふ。と。ま。い。と。押。さ。る。今。は。ハ。熟。睡。た。ら。ん。あ。ま。さ。う。た。ま。い。ぬ
幽。々。軒。の。研。を。ら。ふ。と。い。ひ。つ。た。ち。ゆ。く。蝶。助。ハ。助。や。や。く。安。堵。で。筋
瓜。と。り。一。碗。の。食。と。喫。せ。し。ら。ふ。や。雜。飯。と。り。ふ。もの。よ。や。撞。く。の。葱
菴。よ。栗。も。煮。ご。と。た。る。が。咽喉。ハ。觸。て。栗。の。い。う。か。も。猪。だ。ら。う
な。り。一。口。も。咽。と。下。ら。ず。せ。り。て。ハ。け。と。吸。ひ。試。む。べ。し。と。蓋。と。れ。バ
ハ。チ。ヤ。と。音。し。て。飛。入。る。もの。ら。う。蝶。助。ハ。膏。節。ハ。照。し。て。れ。ハ。大。や。う
る。る。螻。蛄。の。二。ツ。ま。て。飛。い。て。な。る。な。り。そ。の。い。ぶ。せ。と。い。ふ。と。い。ふ。は
山。族。す。と。出。ま。り。換。た。す。と。い。ふ。蝶。助。ハ。助。吾。く。俺。ハ。前。の。大。蛇。の。喫。大
驚。し。て。痞。に。塞。て。晚。飯。望。し。と。膳。瓜。は。と。や。り。這。里。ハ。何。と。云

地方なる小やと同多しバ山狭りや、蟠躰家とり山家よて
傳る。今日客官の裁来たまひはるるく小の産頭轉く大親ふど
とて怖死險所ありて。這里の獲戸の外ハ推者からでかへ
ものなり小徑かれバ、さそまゆであらふや、森さまやま、そこま
ほとと枯葉と火桶は炬らせ、坂を登るよとの人、隙と助さす。
さあ、よく憩寐せん、枕一つ借たまくと傳ふよぞ、山狭やうて、
の砥石を拿來、自來賤が伏家ハ、客役せしと、うねば、枕やうの
餘計もほし、ちとぬすけ、所たまくととげふくいとく、厨下へり
ぬ、隙と助いせん、さかさに、那砥石をまららと、睡と鈍んとそれ
ご、首領とを冷くして、ころころく、いうよと、水ども森つと、
便袋が腐よ、あてのけさ、ゆるゆる、脚と、旅探の夏よ、耐よ、こ

と都天のふつじく、いこの裁方行未なおもひけけける、垣根お
と、さの音もいとあいまげよと、さうさう。俺は代て、やらん。
く、坂の响ふるも物冷く、秋の螢火星と、あまのつ、消強なり。
夜、い、更ぬまど、雲さへ、ら、紀せ、い、むね、お、猛然と、巴風、時
乳母が、添、孫物、ご、う、ふ、ど、お、ひ、お、つ、實、それ、昔、在、豊、後、の、國
の、山、奥、よ、一、個、の、夜、叉、般、の、姫、と、一、個、の、悪、棍、と、親、子、と、い、う、ひ、よ、抽
る、孤、屋、う、り、往、還、旅、客、日、暮、て、は、舍、よ、泊、ま、ら、ぬ、那、姫、よ、こ、ら
の、石、く、れ、を、典、へ、こ、ま、な、枕、と、し、脚、し、ら、を、死、熱、森、ふ、し、は、と、考、暗
号、の、胤、号、を、做、せ、バ、那、悪、棍、な、て、り、梁、の、上、よ、潜、居、こ、ま、な、聽、や
いまや、吊、天、井、を、切、て、墜、せ、バ、旅、客、忽、地、壓、よ、う、と、水、を、か、じ、て
那、親、子、の、と、の、旅、客、の、行、李、を、奪、ま、ら、ず、救、み、あ、ら、ず、救、の、月、は、と

累しど二軍都方の商人伯り合せ陣に腹疼てたえど
かまらぬ夜半に紀出出恭をばしけり浄めんと涸流る谷
水を掬ひふし月めくふ透しんまを影の腸腰救の裏頭
墨々たる旅客こもえて戦怖そのまゝ其処に逃去る裏面
それともあつどして。姫肚裏よりやう多の行李を奪得て
破落戸小共ゆれども一夕の博奕は折負ぬ左めれが粉骨甲斐
もばし今宵の客は行李も願沉重なり。奪得て豫め大半匿し
置べし。踏跡去て旅客の枕上なる行李に手と係るとたふ不
真の胤鳴出と。時を可と上り悪棍吊繩を切て落せの忽地
姫ハ壓し撃を。地獄墮の胤のおどく一身如紙かまて九竅
血が流して死にけり。かろ悪人遂に天道の冥罰とけ。現在の

子の為に殺されし子もまゝ先の旅客の訴へふりて。國司より拘
到を運磔に掛すと。自言自語今俺砥石の枕を難合点裏
面の上。宵の密語も猜疑。這里しまと吊天井やあらんど
らん。燃まらりたる焼火の影眼火ちりほと。明白よれとん
ワのど梁の上より人ありて。よも長やかる槍を掉今や俺胸膛と
刺串らん勢頭あり。蝶々助らつと強ろを声か立てし甲斐ありぬ
這や駒馬の巢穴かろと。自然と陥みを陥穽。今ハ中々覺悟と
極め。南無圓通菩薩。未来の苦患を助給へ。暗く地は普門品
前後滅多に誦しらる。念彼觀音力。刀尋段々壞とつ文々に
いさ。おしひかけぬ一間より。子と一声叫びしが。梁上より君子ハ
鎗持ふ。憧と墜。ウシといて死にたり。日いらとて野の

石ころ
創
被入
可



朧月夜縁香繡史五

九



八

臥も宿るふ。はま寺の二つ家のうち。旅人の危を事と声
なぐけ。障子踢放て。悠々然と走出る。煤く助岸破を起さ
腫を定めて真帆と見る小。三十有餘の長大漢武者修行の
お扮ふるが。堂々たる一表凡ふらに。類どと眼光又能くはくは
猿も燭と持げ。威風邊と拂ひくる。ヤア大人。戸田角藏さま。さう
いひ。煤く助。が。この地方で。飛を相遇と。二人伴し。いひあひ。ぶ
角藏焦燥。や。煤く助仔細。他日。這里。山賊が。匿處なるぞ。
長居せば。悪うらん。那の巖陰と。たへれば。死一條の山径。り。
斤時。も。やく。去。い。そ。よ。ま。や。つ。と。ひ。り。る。漢。よ。山。下。よ。く。
多の人音。き。く。聲。て。坂。成。躋。来。一人の漢真先。よ。と。と。と。
渾家。今。歸。つ。と。時。ま。ば。いつの。写。ふ。い。番。主。の。山。狭。屋。根。よ。跨。う。

大音あげ。衆兄弟滅多の裏面よ入られた。硬漢が来て居
ぞ。前負猪も泊と。せ。せ。と。用心。さ。あ。や。ま。と。喚。り。了。る。に。點。の
山客。南無三寶。前の雨。鉄炮の火繩。消。つ。勇。壯。と。て。ふ。よ
不。どの。事。あ。らん。そ。ま。と。や。く。結。果。し。て。仕。ま。へ。と。箇。く。山。刀。ぬ。き。つ。れ
て。騫。直。よ。切。て。入。る。戸。田。角。藏。ち。つ。も。發。が。と。時。よ。の。て。の。大。松
明。なり。と。の。燭。と。も。て。は。出。る。草。の。庇。よ。は。し。は。ら。も。バ。忽。き。ら。ハ。ツ
火。燃。たち。折。ら。の。暴。風。よ。は。ま。き。潑。々。雜。々。と。焼。ひ。ろ。る。これ。よ。驚。り
屋。根。なる。山。狭。その。ま。く。こ。ろ。く。と。び。び。は。角。藏。賺。と。す。之。跳。下。情
と。踢。殺。して。一。方。が。小。楯。よ。と。り。煤。く。助。が。後。背。よ。か。こ。ひ。お。て。か。る
駒。馬。等。と。矢。庭。よ。三。四。人。切。倒。し。縦。横。無。盡。よ。斬。と。て。ら。れ。この。猛
勢。よ。辟。易。して。お。ぼ。え。ず。志。さ。い。て。遠。巡。る。や。と。も。煤。く。助。猶。豫

なをとりては。縦令山賊めら、何百人とてり圍むもなまら
ての下小勦つくさん。それこのひまに早くあしくと、いそがひし
たつまば、殊く助はんが好て。忙がしく教の道は跑あがり、あーと
そらふはし、逃げ後方よ、やま小馬ハ上道より遁たるぞよ、逃て
逃うけよと。生命あつてそのりぶましの声々小叫ぶるぞ、殊く助肝
魂も身小そいず。小葉高菅をふとど、樹根岩稜の露ひか、まよ
纏りる蔓草よ、いくたびう搏つまらびつす。人声を耳邊に喧し
偶と回顧見をば、手小く炬ろたて、一彪の強人、遅来る逃る
丈ハ逃さんと、疾もつ脚が撃どりふから、息がとろり小をるや、後
方の人声もやえをなり。炬の光も樹がらをぬびと、尻頃ふか、圍
ごころ、又大粒なる雨どらうくと降り来つ、また由きたまど忙と

仕まほして漂つ。僥倖の、大樹の下假の舎、その大夫の松、梢の
滴玉ちろちろ、戦る竹ハ金肩を飾ひ、濕雲とてハ塵むうりも、霧らげ
空よりなつき月、影よころけとめてよくおまをば、ころ尻うけハ卵塔
か、露の水卒兎婆とて、生ぎらけたる生墓か、下よりいりしと
ころらうらぶら、おがえ守髪毛森取、遍身そつと粟はるる、一散
小丘出すより、から尾流く、地響して、石塔左右は、倒まをら、球
不どるる、一箇の烽火、出た、ちまたち割て、其中より、額紙をあて
いと瘦枯と青ざり、男の幽霊ぶ、りくくと、遅うけありや、らう、簡
浮息しや、友不しやと、小ひ招ける、巨匠さ、いとふま、湿る風とろり、氣
味、ころとこか、ざらほし、後より、新の形、よろふが、とく、た、後髪とひつ
ころら、心地して、足むう、ゆるぬ、母のの、呪咀ま、つり、ふあ、ね、

那^う里^りの^し岬^みを^じに^ま塞^ふぎ^二匹^{ひき}の^{てつ}鐵^{ぎやう}牛^{がう}角^{がう}を^らい^い一^い卧^をら^るど^のせ^よ
怖^{おそ}き^{くわ}光^{くわ}景^{けい}か^らう^いふ^れな^ん法^{ぽう}顯^{けん}三^{さん}藏^{ざう}渡^た天^{てん}の^と時^{とき}山^{さん}中^{ちゆう}よ^てお^ま黒^{くろ}
獅^し子^し出^でく^いせ[。]又^{また}雪^{せつ}山^{せん}童^{どう}子^しの^ち千^{せん}尺^{じやく}の^お又^{また}よ^あひ^とま^へる^おひ
こ^て進^{しん}退^{たい}ま^く小^{せう}谷^{たに}ま^りこ^十方^{じやう}よ^う小^{せう}て^呆ま^居し^らさ^しら^らぶ^あん
角^{つの}の^あ尖^とは^突る^くも^一歩^しも^後へ^とい^く反^はし^がく[。]佛^{ぶつ}名^なと^唱へ^し
牛^しの^せ背^{まへ}中^{ちゆう}を^乗越^りま^す意^い外^{がい}よ^穩當^{だう}な^りう[。]い^ふれ^ば牛^しよ
肖^{せう}し^りし[。]巖^{がん}石^{せき}か^らう[。]と^しど^そよ^とふ^く凡^{ぼん}芒^{まう}の^穂も^怖る^やの^ま
と^し後^ご方^{はう}思^しい^くひ^とと^ら奔^{ほん}る[。]對^{たい}面^{めん}より[。]燈^{とう}輝^きこ^らく^し林^{りん}の
裏^{うら}より^射出^しけ^まば[。]お^ひ娘^{むすめ}や[。]人^{ひと}家^がと^とい^ある^うう[。]い^ごう^けぬ^て
匿^{かく}ま^をや^しま[。]一^い文^{ぶん}字^じよ^うう[。]ま^い入^いる[。]こ^いい^らに[。]人^{ひと}家^がと^とえ^して[。]
い^よこ^し一^い個^この^たと^やう^う老^{らう}狼^{ろう}の^め眼^{がん}の^えこ^らう[。]い^たて[。]と^も猛^{もう}ま

ま^まと[。]勢^{せい}須^{しゆ}な^りう[。]那^な狼^{ろう}も^不意^い人^{にん}致^しま^すと^や忽^{たち}ま^ち一^い聲^{せい}
ヲ^ウと^叫ぶ^とあ^たり^不と^う小^{せう}群^{ぐん}伏^{ふく}る[。]救^{きう}千^{せん}の^狼一^い齊^{せい}声^{せい}と^いふ[。]
ヲ^ウし[。]ヲ^ウし^と咆^{わう}る[。]殊^{こと}と^助赫^{かく}得^{とく}て[。]一^い身^{しん}の^せ汗^{あせ}お^とこ^し
四^よ五^ご間^{かん}踉^{りやう}ぶ^ぎさ^うせ^しぎ[。]一^い隻^{しやく}の^狼飛^とる[。]己^{おの}が^肩骨^{ほね}よ[。]齒^はつ^く小^{せう}ぞ
殊^{こと}と^助と^どろ^と謀^{まわ}つ^て巖^い稜^{りやう}を^踏ぶ[。]と^らら^るく[。]と^う真^ま下^げに
雪^{ゆき}類^{るい}落^{らく}月^{げつ}の^輝を^宿を^ふる[。]無^む差^さが^ちの^露の上^{うへ}に[。]し^らく^して
百^{ひゃく}方^{はう}ぶ^りう[。]お^ひの^首よ^うり^ほく[。]下^あ面^{めん}を^吃と^んと^ろせ^ば目^め活^{かつ}
も^およ^しぬ[。]千^ち仞^{にん}の^壁壁^{へき}に[。]月^{げつ}暈^{うん}と[。]ハ^ツと[。]お^ひの^ゆる[。]重^{おも}る[。]
軀^{くわい}よ^蔓ま^りて[。]勿^た心^{しん}比^ひま[。]倒^{たう}と^ぬ。[。]無^む慙^{ぜん}と^いふ[。]愚^ぐかり[。]

○ 閻魔堂

漂^あ列^{れつ}たる[。]夜^よ露^ろ衣^い裳^{じやう}を[。]濕^しく[。]冷^{れい}透^{とう}て[。]一^い身^{しん}氷^{ひやう}の^どく[。]か^らる[。]お^と殊^{こと}と^助

頓とんと氣きうつき。後あと先さき回顧こくごしかりやう。過と刻こくは千尋せんじんの谷底たにそこは響まび
 落おち。軀みハ薙は務むよまるべきとつふるが。原もと來こわいし。墜おち。岩いわ骨ほねも碎くだり
 まの揚や柳なぎの抄こぎは纏まとひも。幸さいとる命いのちはひろひ得えつてお解とれなると。
 まづ公こう安あん堵とる。折をらうの出水で水みづは川か添そ柳なぎすとして。水みづ浸ひまり。其その水みづに
 捨す筏いかだの流ながりて。停とまり在ある際さい程ほど迄までとて。やとら折をの垂た條じょう
 公こう攀かはしひ下くだりて筏いかだの上うへ小こ室むろとる。安あん穩んはして席せき上の上のぶじし日ひ
 一日いちにちの疲つか勞れ一時いちじは出いで。渾こん身しん中ちゆう風ふうは糜みし。居ゐる居ゐるやうおして
 眠ねるおいひせん又また雨あめをちまて神かみ鳴な震しん動どうとる。不ふどろく幻まぼろし
 責せは遇あん地ちして。物もの々々とひなぐもは陣まて影かげは電でん光こう巖いわ小こあ
 つて碎くだりし一聲いっせいの霹ひ靨い頭づか上うへより墜おちりて。忽たちち身みハ雷らい火くわ力ちから為なり
 ろら。しと焼やうせとる。おとらう。性しやう助すけ亡な魂たまいつちあて。呀やもふく。む

不ふそくも黄わう泉せんの旅たびまううれは。十じゅう万まん億いっ土ととよまはまどとるや
 六道ろくどうのけは迷まい出でぬ。極ごく樂らくの方かたハ那なの途とぬ少すくきてうらや
 案あん内ない公こう官くわんふをさ人ひともかく。只ただ足あしは任まかせてゆく。道みちをうらはらく
 過と來こし。岡おか浮うの光こう景けいとらん小こ。老らう少しょう不ふ定てい生せい者しや必かな滅めつの性しやうとてい
 なし。ふよこを朝あ白はくのむゆも待まちど。あるは。死し残ざんもとも。
 いつれまばりの傘かさ舎しゃのつはしむら。中ちゆう今いまハ名な利りの念ねんも断たへ
 して。愛あい着ぢやうの羈かし滅めつびうせぬ。直ちやく視し人じん心しん見けん性しやう成じやう佛ぶつと説ときなれば
 只ただ一心いっしんは後ご果せを助すけうらぬべく。おし細こ人じん。只ただ管くわん南なん無む救きう世せ圓えん通つう大だい井けい
 慈じ眼げん視し衆しゆう生せい誤ごまらたまはず。施せ無む為ゐ寶ぼう所しよは往わう生せいふさし。と
 たまへ。南なん無む福ふく壽じゆう海かい無む量りやう。應おう頂てい礼らい大だい慈じ大だい悲ひ。念ねん願げんし歩ふ行かう
 三さん途と川せんの渡わたり頭づかはちつげく。そのまはもどろし。死し後ご婆ば。衣い刺せきと

雷火の池
地獄の
形容の所



ころんと遅うけ来る小ぞ、只遊よ小げつ、恰好巴小乗合満て符掉
 出と所よた人あつたる、やをら飛乗をばとや押出し、程ほど彼岸つて
 同舟の亡者ども皆萎しくにならうたるゆ、蝶と助が亡魂の半駒
 躊躇居る小牛頭馬頭の鬼ども、虎皮の禪とはけ、よよ大なる鉄
 棒を杖はと、矢庭は蝶と助を左右うひつ夾み、ひたひたのりて
 たてゆく小ぞ、こい悲しやとや泥犁地獄は墜たるよと、うくと泣とるは
 ゆく、地獄の勢頭かゝるよ火炎の中は焼くともあり、雪氷の中
 小閉らうともあり、又ハ赤青種くの鬼どもは、い来て罪人の牙と
 段々小食裂もあり、又惡鳥のたまり眼を啄まうともあり、毒蛇は身
 纏りともあり、刀山地獄とも、垂氷ともらるるよ、柱並とも如と劍の
 山は、怖しものどもが鐵の管は揚て逐よ、罪人がいせんともさけ
 まば、位叫ひほこせ上うとせ下してらるる、ひ、妄語をよむもの
 小や、釘貫して罪人の舌はぬと、ぎと如何なる科と犯せし小や防
 阿羅刹の鬼ども、亡者をよよ入きて搦く、えんをば、えんをうらに薙
 務よひりし鬼ども、活くこつて息吹うれむ、まことこの容よする、あ
 やしの火の車とゆく、いあつて誰か定るよや、その外叫喚、大叫喚
 紅蓮大紅蓮、衆合黒繩等活等の地獄の責彼血盆の刑罰は
 今目の前よる事かまは、その酷たらしと、月もあてらるる、光景も
 とや陰司地省よ、候とらるる、二隻の鬼ども、蝶と助と閻羅殿前よ
 引とらるる、三角眼回々、鼻業の天秤、淨玻璃の鏡も、嚴よ具ら
 鬚髮赤鬚、黄蟻、極の判官、排列あり、中央の椅子よ、靠頭よ、一個
 の金冠を戴と、面ハ朱を濡らう、ふとき、閻羅大王大の眼と念し

まば、位叫ひほこせ上うとせ下してらるる、ひ、妄語をよむもの
 小や、釘貫して罪人の舌はぬと、ぎと如何なる科と犯せし小や防
 阿羅刹の鬼ども、亡者をよよ入きて搦く、えんをば、えんをうらに薙
 務よひりし鬼ども、活くこつて息吹うれむ、まことこの容よする、あ
 やしの火の車とゆく、いあつて誰か定るよや、その外叫喚、大叫喚
 紅蓮大紅蓮、衆合黒繩等活等の地獄の責彼血盆の刑罰は
 今目の前よる事かまは、その酷たらしと、月もあてらるる、光景も
 とや陰司地省よ、候とらるる、二隻の鬼ども、蝶と助と閻羅殿前よ
 引とらるる、三角眼回々、鼻業の天秤、淨玻璃の鏡も、嚴よ具ら
 鬚髮赤鬚、黄蟻、極の判官、排列あり、中央の椅子よ、靠頭よ、一個
 の金冠を戴と、面ハ朱を濡らう、ふとき、閻羅大王大の眼と念し

多ま把て前なる卑子に確と拍やを罪人女あつきの
科あるふり。まうしの刑は行ふたうと。呼びたす。堪く助まの
威嚴よ震恐もて敢て作どえすた。悲し訪へ。小人は安ん
を。一点の悪は造るる記は。唯一回の色慾は穢す。世
の。伏願く。大王可責の苦患は寛させたま。この時大王
勃然として大と怒り。汝が前生數十の業悪ははく。大隠匿の
て。做せ。その報前生よ。天年公竟し。や。ゆるや。抱
到。なら。さら。早くその淨波際の後と照して。前生よ造る。は
宿劫の。と。あるべし。のたまひ。は。味く助。鏡面よ向へ。
い。ふ。六王の作を。前。世の宿業。明白と。写る。い。今。入。と
陳。と。何。か。た。う。う。養。ま。て。い。は。し。る。大。王。類。獄。卒。と。

那罪人いと。呵責。な。ま。と。べ。し。と。分。付。と。す。人。以。俄。は。虚。空。よ
死。雨。異。香。薫。り。う。う。天。樂。の。の。す。い。は。大。王。遽。て。荷。子
か。お。う。ら。喝。して。獄。卒。を。退。退。再。拜。さ。し。出。せ。よ。た。し。ら
一。乃。の。紫。雲。舞。下。り。白。衣。大。士。善。哉。童子。が。従。ぐ。柔。和。端。嚴
か。る。る。石。う。降。臨。を。ま。り。聽。て。王。音。と。啓。さ。て。曰。く。新。七
者。降。く。助。ハ。前。生。南。印。度。の。波。斯。國。の。太。子。と。り。し。ら。その。一。代。は
犯。せ。る。罪。科。注。う。ぬ。と。後。来。議。悔。し。て。一。萬。部。の。法。華。と。書。寫
せ。る。功。果。あ。れ。ば。や。其。罪。と。償。る。は。よ。り。と。う。況。て。那。者。娑。婆。小。臣
と。と。年。比。我。を。頼。事。め。り。す。我。今。大。方。便。を。も。つ。て。渠。と。濟。度
ま。し。む。と。に。う。再。い。閻。浮。よ。向。と。し。の。事。か。ま。は。閻。王。か。し
と。と。佛。令。敢。て。怠。慢。せ。ず。と。や。く。眞。官。に。令。し。て。蝶。と。助。が。首。級。と

たり、忽地額より血の流るる。穴怖し穴羞しといふ懺悔とほ
救回首と叩き。罪科とよびみけきほ、偶とうら作けい。三角服
回、鼻小はあらで、男女の生首ニツまきて、上上の掾は吊しありて、
鮮血をらしし落るるなり。消がてかる養燈の火は、透るる髪、
蘇よりれし、青さたる女の生首口瓜啓て、しししとひひけ
まへ。この時蝶々助動轉して、忽ち尻屋は襲と打坐、逃出人
小も腰ぬけて、まふとあはす。那女の首まきりしと、名かくれば
膝し助一編くまあり。目瓜塞とて、一公は佛の市名と唱へ居
たり。聽てまきと叢よとぞ、空の青かともやまらざらう。細とやう
なる声きて、ししとよぶといとたぢげかて、やよ弱人ふれし
幽霊よてもふく、まきと化生の物ももふし。しししと歩後と人言に

てはるなり。しししと 姫路動番の武士佐用軍太兵衛といふもの
婢たる。千石取の母御へ奉仕はしししと、主人軍太兵衛とら
はよをぬけ、さあししと口説りさるまど、しししと良人のつるを
あざとくししと操瓜破るこかく、はうは責らるるまて、しししと承引
ざりし。小甲夜よ主人の酌瓜取居て、何んふく若黨新吾と貞
ん合うらららししと、主人ことしめらるる。原太新吾と款ある
ゆへ、ししとふししとくわさるか。そ斬心や新吾の罪か、これ忽ち
當座よ首くらあし、その生首と、ししとわが謀よらるるまて、し
おそろしと、闇魔堂よ撃つるまき、情かくも梁よ個りたけか
くうららぬ見せ命晴く改て、んは従くたむかく、この世のい
しぬとらせらるるまき、ししと分別せよ、おまきよ、ししとまきと



回答をすまそと。何れはぐりて帰らましあはを町うりの善根ぞ
や、あゝ城却して助てたべ堂の後よ胡村とあらんとおろし
涙あふまをちみいまやうりしてかさくどけい、涙も助耳ふとまり
うが身の憂よおしひらぐべたあゝ實も不便と公成雄しく
どりる瓜し切子の油火寒げそくんとバ推とまゝいとの流るは
るゝと腮をまといひ、まど嫩弱と一個の女子男の生首襟ふかけ
後よ小細うきて、梁よ吊きてあり、涙も助あはをぐりいにてこ
ら、い様ととりあうて助けおろしまおらとぐりと堂の敷居を
紙んととるに、あやしの人殺るよりも、こゝろ知ぐつる軍をま場と
やらんが女が殺しあまうほらん、さりとてい便ふるをど、脊中に
腹ハ替ぐくと、岡王親像の壇の下よ伏し屈、をさうに外面と

さし覗けば、双刀佩る一個の武士、三昧とさし捨てる煙を
あゝ麻本なんど泣しとろし、泣かさの、岡王堂よ入来りて、豆
の火さふる切薪の火をうらし、燃しはけ、まど楢桶よ阿阿と汲
あうて、白刃よ水を流し、け、血がわらふとよあり、煙さがる火乳
よとよ見をば、を別人よあゝま、戸田角鹿してあり、それば、大に
収ひ、そのまど這出角鹿よ、涙も助なりとつゝ、角鹿泣と見て、
それら、い、涙も助ふる、かゝりて、出會も不思議、おまき、け
危うき、瓜、逃まられしと、僥倖か、まといひ、まど、涙も助まど、救
命の恩と謝し、おろし、まど小人が身、のう、小、種々、つら、なる事、の、傳
りて、一口、小、い、ひ、い、れ、が、さ、け、ま、ま、ど、齋、壇、家、の、賊、巢、と、道、と、保、
このうと、いらは、し、話、き、させ、ま、ど、大、人、ハ、何、等、の、事、あ、り、て、さ、ふ

山奥の徑遇たやいふやとふく誦うたづぬまは角鹿このと死
已に血刀を拭ひ完て膝と助いひふ和至も下に居らまよと會
扱して堂の石壇に屍をうけ某とて中縁に詳に説くはハ一
小ハ盡とべうす。さうバかい撮んでいひずさん去る彌生三日老
所所東山の新莊して曲水の宴催させ浴ひしぐ一個の僻者
あつて黄昏は糸を入て櫛の柄は匿をみて所産は向つて死
かとうちうけしところ小王公露三即殿どうふ市産ちうく在り
がハ快長柄の挑子としてこまとけとけとけと死小王公ハ名よ
めハ早業の達者ふまは備危ら箭とらう早く那の僻者をば
即産は射墜とれしハ某をかくして捕てとらふせまどらうに生
擒しハ両管領の令して緊く戒め囹圄ハ斬ぎさうまらうが渠ハ

一方ふらぬ水ものこそ兼く黨類よハ名せしや。一夜風雨
烈しく鬚固の者の息が見をば獄を破て逃うせたり。あこ
小て百般詮議ある小渠が飛刀ハ金の十足獅子の裏指并ま
さうまらうくもふき山名宗全が秘虎の道具とてその那の硬漢ハ
宗全が遺孽阿修羅丸は遠いほ角鹿をハ那の僻者ハ面
体とも認へとまは。いそ死渠はか付るハかちても搜へか。再ハ
石捕。君の市心と安んじなつとと官領政元どの。市内急うらと
両君候より上意城うけり。さてすさかの飛刀ハ河原でたけ
たう曲者が并とも一對ふまは當家も仇おとものと察しハふ
めて尋出討て控人とおとさかく身が拾。深山幽谷の
隈にとも搜索しが頃味方の透波より内通して那叛人山名阿

戸角庵
奇術飛行
と説く



修羅丸いこもろり先海寇の魁首とあり。赤月霧古傳門と名
 とせしものまで。ちうごう筑紫の玄界小山麓とせしをぬら
 り小王公の草履取袖助と問者し差いしおけバ一左右を付て
 熟く謀てふん一先帰國せよと國老和泉守よりいひませしゆ
 山陰道を経歴しけし中途中途よりてし明杖くらす賊の
 巢と舎つしあはしく汝が危が助いさか舊恩の償のいふれり
 ふ山賊むらぬ薙ぎせしが後ハ新手のもの弛加り飛道具て
 ころ巻ゆへる極意の秘術なむつて望とつてうら扇と虚心の
 まろしあやまるとの迫の峰より麓下りてここて這里までまろ道の近
 いて病狼よ出くはせたり。その和主よ飛うて。とも小ころびをち
 くらひまといひしものや。その時飛ちて。那狼とたちまちに刺殺

揖保川の
渡頭里入
風客といふ
つるこころ

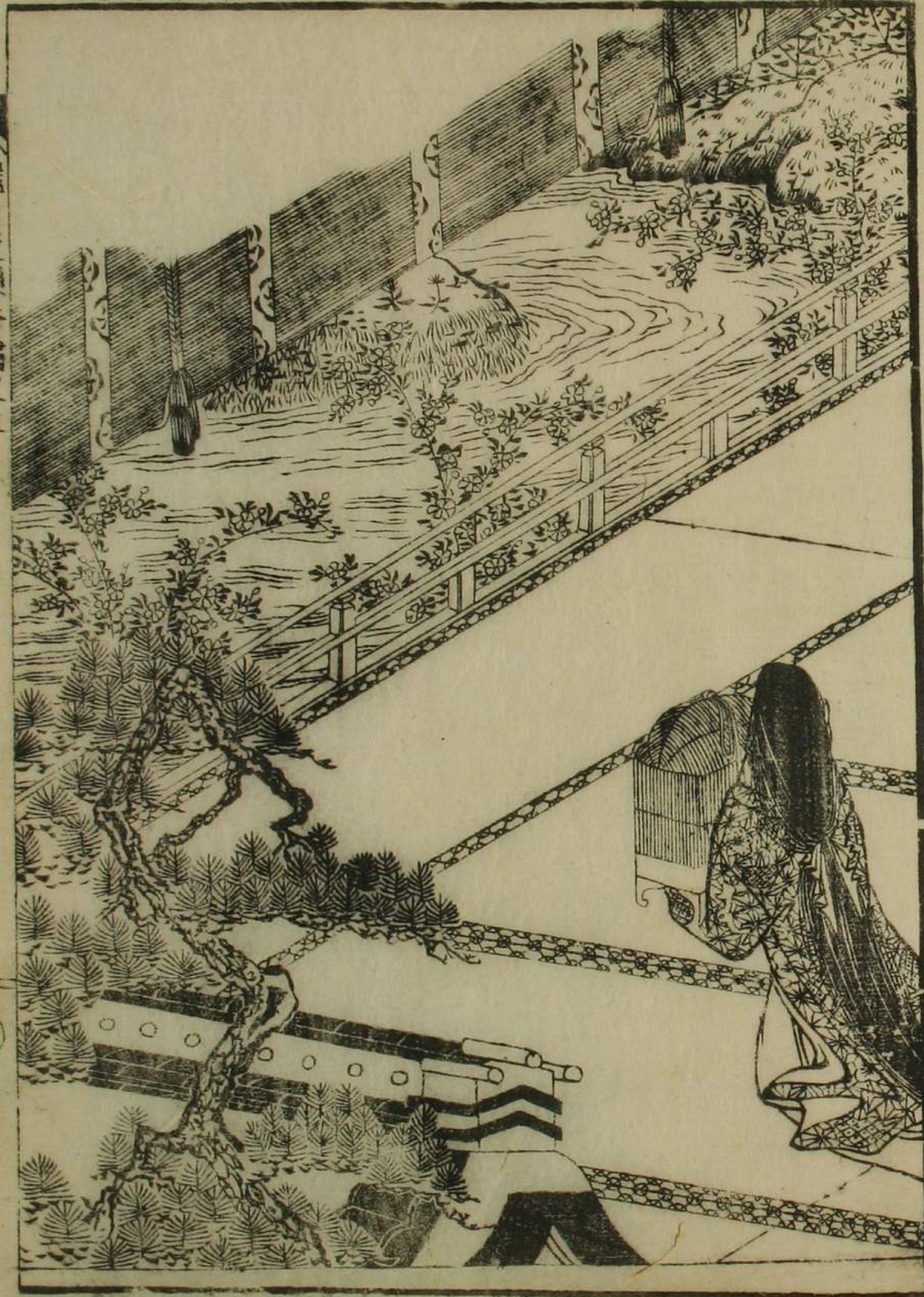


地方の者の發をまつら、まゝ揖保川の沖へとも同様の話をや
 小今のさね這出水は後代は伏して流をたつた弱人にアし
 やがて記あがりて、空氣たるや、風病たるや、あつぬりや、
 泣苦いむさよかるゆへ、兩個の里へは、杖らして、西の方へ往くと
 かろき、今和主が、後話をや、代の上へて、雷の撃をとりて、
 りいし、後ハ、氣ぬけして、うつふく、遊魂のおとくかりて、この
 間魔堂まで、うらな、まゝものなりと、噴飯てものが、うらな、思ひ
 がけども、堂の裏、いり、今、あつた、し、ありし、狢助が、所縁の
 者、て、い、やく、助、て、たま、い、と、志、と、り、よ、叫、ぶ、声、と、い、と、怒、げ、あ、り、
 角、花、け、と、ち、の、ぶ、ろ、よ、と、ぞ、襟、助、と、み、り、り、市、活、よ、す、り、ら、
 こ、と、い、て、あ、り、と、額、の、血、の、と、よ、り、那、女、が、訴、へ、と、い、と、あ

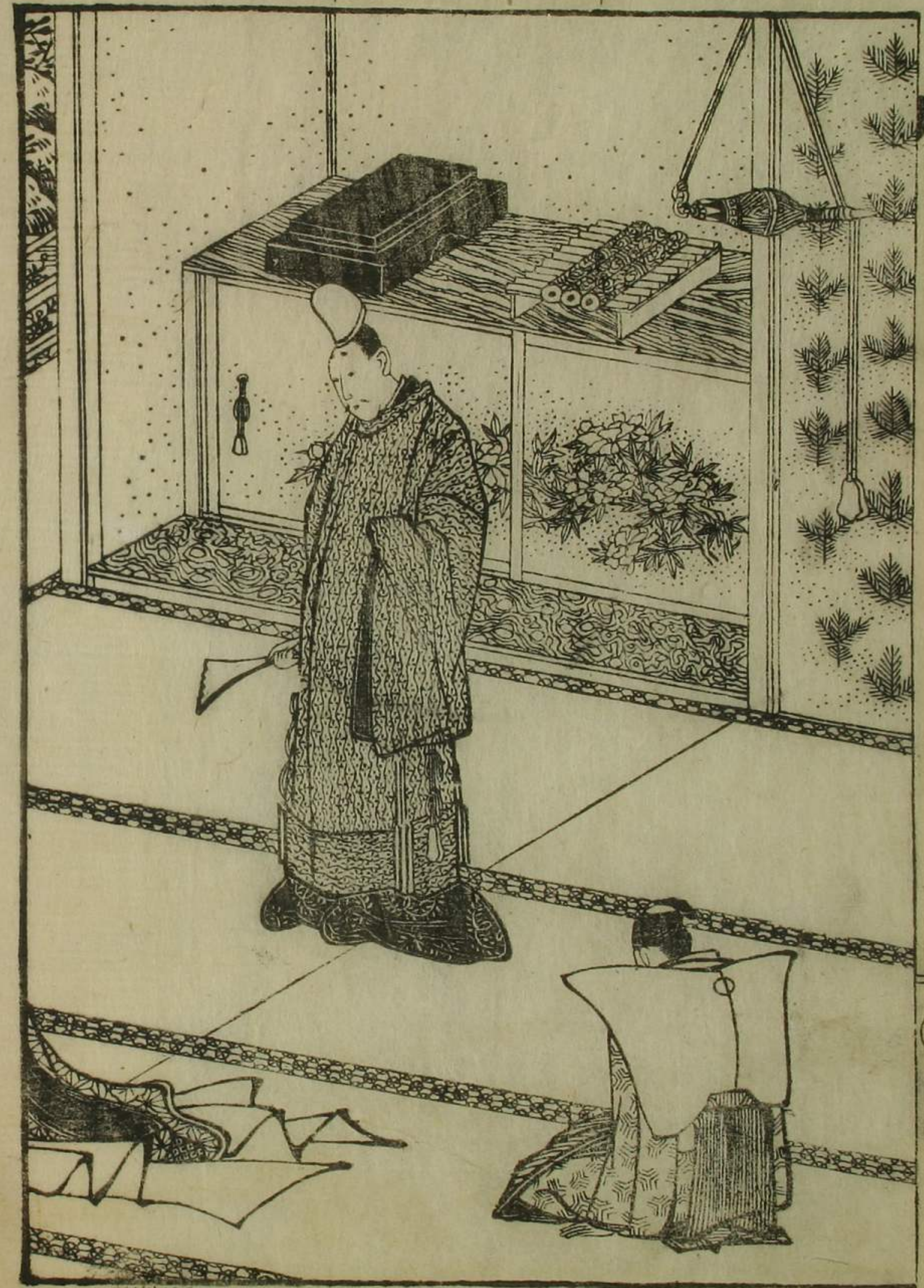
らましし小ほげなとむ。用流うぶづと。そのま。栲うけ。どめく
扱けおろした。忙しくその細繩が不ど死痛り。那女そのま
地は跪つ。列位。今の所主。この所恩。いつの世より。つとむ
べ。こ。う。づ。う。し。ぶ。づ。う。ら。う。く。袖助と二世うけて。契。し。小夜と
ヤもの。夫。袖助。い。う。ふる。幸。や。行。ぐ。と。ま。う。ず。ふ。ア。い。ゆ。その
跟。を。兼。ひ。け。播磨。ハ。夫。づ。本。國。を。川。に。環。合。風。路。も。あ。る。ぞ。と。
ころ。ど。尋。下。ア。ア。今。よ。た。び。あ。た。く。は。路。費。ハ。幸。か。さ。つ
せん。と。な。る。に。な。る。せ。し。と。い。う。も。その。ら。と。い。ま。り。ふ。り。し。と。膝
の。と。中。助。こ。ま。は。付。ア。て。一。五。十。分。う。り。り。と。は。角。流。す。て。お。ま。い。ひ
小。お。い。ひ。お。か。ら。ぬ。因。ふ。ま。い。づ。と。う。ろ。しく。計。ら。へ。し。も。ま
五。更。も。不。ど。り。し。い。ご。ま。ら。ぶ。身。が。郎。へ。ま。ら。る。べ。し。と。二。人。は。こ。め。て
うら。は。ま。ご。ら。姫。路。を。ほ。し。て。い。そ。だ。ら。ん。

○驚上

かくて。膝。助。ハ。田。角。流。が。計。ら。ひ。よ。て。飭。萬。津。も。渡。海。の。船。に
便。な。と。その。夕。ら。う。葉。り。ら。う。が。一。路。順。風。順。潮。不。ど。お。浪。た。ふ
と。て。そ。れ。ら。都。と。は。て。の。ぶ。る。お。の。後。づ。と。幸。成。せ。い。ぶ。と。や
親。許。か。ら。と。あ。る。は。しく。疵。も。つ。趾。の。夜。も。紛。と。て。糸。は。い。い。と。が
家。ハ。圓。高。く。て。這。入。が。と。別。家。の。小。右。衛。門。が。門。を。叩。き。て
お。の。上。な。ら。う。と。告。て。執。成。を。た。の。ま。ら。う。小。右。衛。門。夫。婦。い。と
か。く。お。も。ひ。母。屋。へ。ゆ。よ。て。内。く。膝。助。が。母。も。談。合。て。隠
居。昭。久。當。主。孫。市。が。口。か。ひ。し。て。壁。訴。訟。と。ほ。し。け。ま。ご。も。
その。幸。ん。と。昭。久。孫。市。が。耳。を。入。り。し。バ。自。然。孩。児。が。と。あ。く



白殿
 米女
 雲の雛
 け
 終入



と田来りふ。ひつらとて宇我田殿へ渡さいで道たぐると以ての外の氣さふるゆく。小右衛門ころろづとて。日づら隠居。睦まじれた皆川氏と頼。種くまらひらひら。播州さる清見どのも。密は消息ありて。幸便たるべし。この厚き庇もたがごとく。さらばとて久離切して不通世し。とせひもふき。蜷川氏の深切ふる人にて。長らく小右衛門様よかくまいまあらんもいと幸意ふし。幸ふることをいれ。とて自分様して。一条關白兼良公の親掌。松濤丹後。丹下と。方へ。螟蛉よほり。かき。丹後り氣も入りて。睦く日を送り。そまら。睦く助ハ松濤米女と名改め。が。不どふく。石出されて若所所の所近習。小加へら。自來老實き性ふき。上くの御んよか。かひ。

羽ふりよく奉仕て年と逾。一日大臣米女と召され。あれなから。然の雛い辱くも上皇御秘藏あそ。と。三光と名づつる常の児あり。は。宿も。残月と。名鳥。は。頼。姑射山も。丹後鎌倉へ使せし。田守ふ。を。孩児。あづけて。ほけ。見。させよとの院宣。か。る。いと。ら。う。が。さ。れ。こ。と。な。り。餌飼。なん。と。い。さ。ら。な。り。よ。ら。づ。大。切。守。護。せ。よ。と。お。ご。ろ。う。ふ。作。を。米。女。い。い。ま。ふ。ら。ぬ。く。台。前。以。畏。と。ら。る。お。ま。ら。う。り。後。常。の。下。の。後。ふ。ら。二。編。よ。の。せ。て。種。々。の。話。柄。は。こ。あ。や。ま。り。強。さ。を。な。せ。り。



朧月夜戀香繡史五

大尾

朧月夜戀香繡史

浪花

柳浪

著述

江戸

俊満

圖畫

浪花

高造

筆工

文政三年庚辰正月

書林

大阪本町四丁目

岡嶋真七



